



都市文化研究センター (UCRC) の活動の概要と運営委員会

佐金武 (文学研究科准教授, UCRC 副所長)

1. 活動の概要

都市文化研究センター (Urban Culture Research Center; UCRC) は大阪市立大学大学院文学研究科内において研究・教育を支援し、関連諸事業を牽引するために設置されたものである (開設 2007 年)。文学研究科専任教員, UCRC 研究員, 特別研究員 (UCRC 研究員と兼任可) によって構成され, 所属する大学院生, 若手研究者の研究活動に対する経済的支援や様々な機会の提供, 研究成果の国際的な発信に向けた援助などにとりくんでいる。本センターはそうした活動を, 学内外の競争的資金を継続的に獲得することで行っており, 今年度中もいくつかのプロジェクトの採択および研究成果を得た。なかでも継続中の日本学術振興会の事業「国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業 (旧頭脳循環プログラム)」は, これまで文学研究科が構築してきた国際的ネットワークを十全に活用したうえで, さらに次世代の専門家養成に資するものとなることが期待される。

また, 昨年度に引き続き, 学内競争的資金の獲得もあり, 「戦略的研究 (基盤研究): 豊臣大坂城本丸の復元—文理融合・博学連携プロジェクト— (研究代表者: 仁木宏教授)」が現在進行中である。

文学研究科内において, 専修・教室の枠を超えた将来性のある共同研究を開拓・推進するため, 公募により「研究科プロジェクト推進研究」を採用して助成を行っている。今年度新たに採択された 4 件のテーマはいずれも多分野間の交流を促進しつつ, それぞれ目標とする成果を着実にあげている。

- ①テーマ: 文学研究・文化研究の方法とグローバル展開を探る, 研究代表者: 堀まどか准教授
- ②テーマ: 大坂の「記録」, 大阪の「記憶」, 研究代表者: 菅原真弓教授
- ③テーマ: モダニズム揺籃期における産業/芸術観の諸相, 研究代表者: 白田由樹准教授
- ④テーマ: 東地中海世界の歴史的展開を, 古代から現代に至るまで通時的に再検討する, 研究代表者: 北村昌史教授

さらに, 若手 UCRC 研究員による「UCRC 若手プロジェクト」の募集も行い, 今年度は 3 つのプロジェクトを採択した。

- ①テーマ: 近現代メディアに表される軍事に関する比較研究, 研究代表者: 前田充洋
- ②テーマ: 都市空間と人種化に関する社会学的研究, 研究代表者: ケイン樹里安
- ③テーマ: 戦後日本における都市音楽文化の形成と変容, 研究代表者: 加藤賢

いずれも独自の視座にもとづく有意義な研究テーマである。このうち, テーマ③に関わる成果の一部は, 文学研究科大学院説明会と同時開催の都市文化研究フォーラム (2019 年 11 月 23 日, 大阪市立大学学術情報総合センターにて開催) において, 市民にもオープンな形で発信された。テーマ①と②に関しても, それぞれ同フォーラムにおいて研究発表を実施する予定である。

研究成果の発表媒体として, 雑誌『都市文化研究』および英文電子ジャーナル『UrbanScope』を引き続き発行する。また, 市民への成果還元の一環として, 上方文化講座を開催し, 文学研究科叢書の出版を継続する。

2. 運営委員会

2019 年度 UCRC 運営委員会委員は以下の通りである。

文学研究科研究科長: 小林直樹教授 (国語国文学)

所長: 草生久嗣教授 (西洋史学)

副所長 (事務局): 佐金武准教授 (哲学)

事務局: 石川優特任助教 (UCRC), 前田充洋 (スタッフ)

運営委員会委員: 大場茂明教授 (地理学), 辻野けんま准教授 (教育学), 長谷川健一准教授 (ドイツ語・フランス語圏言語文化学), 山本真由子准教授 (国語国文学) 以上のほか, UCRC 研究員もスタッフとして研究活動に参加しており, その活動は研究履歴として認められる。

●UCRC のホームページ

<http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/>

国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業「周縁的社会集団と近代—日本と欧米におけるアジア史研究の架橋—」

佐賀朝 (文学研究科教授)

1. 国際共同研究の概要

2017 年度に「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」として採択された本事業は,

JSPSによる事業再編・名称変更により2018年度から「国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業」となった。継続して研究課題「周縁的社会集団と近代一日本と欧米におけるアジア史研究の架橋」を掲げ、2019年度も精力的に事業を推進している。

本事業は、アジア諸地域における周縁的社会集団が、ヨーロッパ帝国主義の下、近世から近代への過程でどのように変容したかを、「排除」と「包摂」の経験に焦点をあて、世界史的な視野で解明することを目的としている。日本の近世における周縁的社会集団に関する豊富な一次史料の存在と独自の社会構造分析の方法を活かして、欧米の日本史研究者や日本のアジア史研究者、さらにはサバルタン研究などの方法的蓄積がある欧米のアジア史研究者も加えた四者を架橋する形で新たな比較史と社会分析の方法的深化をはかり、多極的な近代移行期像の構築を目指すものである。

国際共同研究の方法として、従来型の個別セミナーやシンポジウム等だけでなく、若手派遣研究者の活動と海外連携先の研究者の招聘を軸として「史料・方法融合型セミナー」や「史料読解ワークショップ」など、新たなスタイルを採用し、実践する点にも特色がある。

研究期間は、2017～19年度の3年間で、2019年度は事業の最終年度にあたっている。

2. 研究組織

主担当研究者 塚田孝（文学研究科教授）日本近世史

担当研究者

佐賀朝（文学研究科教授）日本近現代史

井上徹（文学研究科名誉教授）中国近世・近代史

北村昌史（文学研究科教授）ドイツ近代史

草生久嗣（文学研究科准教授）ビザンツ帝国史

脇村孝平（経済学研究科名誉教授）インド近現代経済史

安竹貴彦（法学研究科教授）日本近世近代法制史

森下徹（山口大学教育学部教授）日本近世史

町田哲（鳴門教育大学大学院学校教育研究科准教授）

日本近世史

ジョン・ポーター（東京外国語大学大学院国際日本学研究院講師）日本近世史

人見佐知子（岐阜大学地域科学部准教授）日本近代史

若手派遣研究者

上野雅由樹（文学研究科准教授）オスマン帝国史

彭浩（経済学研究科准教授）近世東アジア史

守田まどか（UCRC 研究員）オスマン帝国史

島崎未央（UCRC 研究員）日本近世史

吉元加奈美（都市研究プラザ博士研究員）日本近世史

海外連携先

・イェール大学

ダニエル・ボツマン（同大学歴史学部教授、日本近世・近代史）ほか5名

・シンガポール国立大学（NUS）

ティモシー・エイモス（同大学人文社会科学部准教授、日本近世史）ほか3名

・ノースカロライナ大学シャーロット校

マーレン・エーラス（同校准教授、日本近世史）

・上海大学

張智慧（同大学文学院歴史学部副教授、日本近代史）

3. 2019年1～12月の研究活動

2017年度に公募・採用した若手派遣研究者である守田まどか氏（UCRC 研究員・オスマン帝国史）の継続派遣が19年3月に終了したほか、18年2月派遣開始の島崎未央氏（UCRC 研究員・日本近世史）の派遣も19年1月に終了した。18年9月から2度目の派遣を行った上野雅由樹氏（文学研究科准教授・オスマン帝国史）は9月に、18年10月から派遣した彭浩氏（経済学研究科准教授・近世日中関係史）も8月に帰国した。なお、18年12月から派遣した吉元加奈美氏（UCRC 研究員・日本近世史）は19年12月に一時帰国したが、再度、イェール大学に派遣中である（2020年1月終了予定）。また19年度には新たに公募を実施して藤本大士氏（東京大学大学院総合科学研究科修了）を公募により採用し、19年4月から11月までイェール大学、ついで11月下旬からはNUSに派遣中である（2020年2月に帰国の予定）。

2019年1月以降のセミナー等の活動は以下の通り。

- ・1月15日 第13回セミナー（ティモシー・エイモス氏（NUS）・安竹貴彦氏、大阪市大）
- ・1月31日 第14回セミナー（張智慧氏、大阪市大）
- ・3月1日 第15回セミナー（藤本大士氏、大阪市大）
- ・3月19日 海外セミナー企画（イェール大）
- ・3月25～27日 第2回海外セミナー、第2回史料読解ワークショップ（若手派遣研究者3名を含む日本側8名が報告、海外連携研究者らも多数参加、イェール大）
- ・4月25日 第16回セミナー（アラン・ミカエル論文の検討、松鹿彩花氏、大阪市大）
- ・5月9日 第17回セミナー（ロヒート・デー氏の論文検討、野村親義氏、同上）
- ・5月25～26日 第1回総括シンポジウム（海外連携研究者7名、国内担当研究者ら10名以上参加、大阪市大）
- ・5月29日 第18回セミナー（マイトリ・アウンティーン氏（NUS）、同上）
- ・7月11日 第19回セミナー（エーラス氏、同上）
- ・9月7～8日 第2回総括シンポジウム（海外連携研究者1を含む海外ゲスト7名、国内担当研究者ら10

名以上参加，大阪市大，三都科研と共催)

- ・10月25日 第20回セミナー（人見佐知子氏，大阪市大）
- ・12月6日 第21回セミナー（上野雅由樹氏・岩田和馬氏，同上）

以上のうち，5月・9月の総括シンポでは，多くの海外連携研究者の参加を得て，それぞれ40～50名ほどの国内外の研究者が参加して，周縁的社会集団の近代化経験をめぐり議論を深めたほか，日本近世社会集団の固有性や史料作成・保存の特質も浮かび上がらせた。

以上のほか，最終年度の事業としては，2020年2月には第22回セミナー（大阪市大）を，同年3月には学部評価研究会を，それぞれ開催予定である。

また2020年秋には大阪市立大学国際学術シンポジウム（文学研究科主担当）を，イェール大・NUS・上海大などの海外連携研究者を招く形で開催の予定である。

なお，本事業のWEBサイトも継続して公開中であり，各種イベントのニュース記事のほか，英訳つきコンテンツである「都市史研究の最前線」や「近世日本社会集団の世界」などを随時更新している。（<http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/MSGEM/>）

2018年度 戦略的研究（基盤研究）の活動

仁木宏（文学研究科教授）

1. 研究課題

豊臣大坂城本丸地区の堀・櫓台の復元研究—地質調査にもとづく文理融合・博学連携—

2. 研究組織

研究代表者（仁木）をふくめ，計10名で構成。文学研究科3名（仁木，塚田，岸本），理学研究科2名，大阪歴史博物館など市の研究機関3名，他大学1名，他府県の研究機関1名。

3. 研究目的・内容

豊臣期大坂城の本丸とその周辺については，江戸幕府大工頭中井家に伝わる「豊臣時代大坂城指図」がほぼ唯一の詳細な絵画資料である。しかし，同図は17世紀の絵図であるため，誤差があることは避けられない。また石垣の高さ，城内の地表面の高低差などの情報も正確かはかりかねるところがある。こうした限界を克服するためには，サウンディング調査や，表面波探査，微動アレイ探査などを地点をかえながら繰り返し実施することで，

絵図の正確さやゆがみを測定するとともに，高低差の情報収集する必要がある。

本研究では，昨年度までにひきつづき，現大阪城本丸広場においてサウンディング調査を実施した。スウェーデン式サウンディング試験は，金属製ロッド（棒）の先端につけたスクリュー（直径約3cm）を機械で垂直に地中に挿入し，地層を貫通する際に必要となる貫入抵抗の大小から礫質・粘土質の違いを判別し，豊臣期の地表面の高さを求める。またスクリューは，石垣の石や，石垣を内側から補強する栗石などにぶつかるとう貫入できなくなることから石垣の位置や高さを知ることができる。

微動アレイ探査は，本年度，初めて実施した。この探査は，波浪・風・走行車両や工場などを源として生じた「常時微動」を利用し，表面波の位相速度を周波数ごとに解析し，地下のS波速度分布を得るものである。地震計と測定モジュールを一定範囲にならべることで，二次元・三次元で地下の構造を明らかにできる。二次元アレイ探査は，直線状に測定することで地下の「断面図」を作成する。三次元アレイ探査は，測定点を方形メッシュ状に配置することで三次元構造を明らかにするものである。サウンディング調査に比較すると精度は落ちるが，簡便で，二次元・三次元の評価ができる。大規模な堀であれば，位置や深さを知ることができると考えた。絵図や，これまでのサウンディング調査や発掘調査の成果と連動させることでより正確な構造解明を目指した。

4. 研究経過

2018年9月以前の経過については既報。10月16日，本丸広場にて微動アレイ探査を実施した。理学研究科の山口覚教授に探査結果を解析していただいた。二次元アレイ探査では，巨大な堀の存在はほぼ確認できたが，堀の落ち込み地点や斜面の角度，堀の深さなどを正確に確定するにはいたらなかった。三次元アレイ探査については，さらに結果の判断は困難であった。引きつづき機会をみて探査を実施し，回数を重ねることで精度を上げてゆきたい。

12月15日，公立大学法人大阪市立大学・公益財団法人大阪市博物館協会包括連携協定企画，シンポジウム「豊臣大坂城研究の最前線」を大阪歴史博物館にて開催し，一連の研究成果を公表した。共同研究者の三田村宗樹氏（理学研究科），市川創氏（大阪府教育庁），仁木などが研究報告を行った。会場は盛況であった。

2019年度 戦略的研究（基盤研究）の活動

仁木宏（文学研究科教授）

1. 研究課題

豊臣大坂城本丸の復元—文理融合・博学連携プロジェクト—

2. 研究組織

研究代表者（仁木）をふくめ、計10名で構成。文学研究科3名（仁木、塚田、岸本）、理学研究科2名、大阪歴史博物館など市の研究機関3名、他大学1名、他府県の研究機関1名。

3. 研究目的・内容

2018年度に引きつづき、サウンディング調査によって、豊臣大坂城の本丸周辺の地下遺構の実態解明に取り組むとともに、研究成果の学会発表、学術誌への寄稿、さらには市民向けの公表に注力した。

4. 研究経過

2019年6月11日、9月1日、本丸広場にてサウンディング調査を行った。豊臣大坂城詰ノ丸の上ノ段と中ノ段の間の石垣、詰ノ丸西寄りの櫓台、「米倉地区」（大手地区）東側の堀の落ち込みなどの検出を試み、多くのポイントで詳細を把握することができた。一方で、いくつかのポイントで想定していた石垣・段差などが確認できなかったが、これは、豊臣大坂城の破壊＝徳川大坂城の築城時における工事の跡を示しているのではないかとの知見にいたった。

研究成果は、大阪歴史学会大会（6月30日、関西大学）にて、市川創・仁木宏・森毅「豊臣期大坂城の復元について—サウンディング調査の成果から—」として報告した。大会報告の内容は、2020年に大阪歴史学会の学会誌『ヒストリア』に掲載の予定である。また、仁木宏・家治清真『豊臣時代大坂城指図』（中井家所蔵）をめぐるノート」を執筆・投稿し、『都市文化研究』（本号）に掲載が決定した。

2019年6月4日、学術情報総合センターにて、三田村宗樹教授（理学研究科）とともにこれまでの研究成果の記者発表に臨んだ。夕方の在阪各局のニュース番組、ならびに翌日の朝刊各紙でとりあげていただいた。その後もマスコミの取材はつづき、またこれをきっかけに多くの市民や関係機関に研究内容が周知され、成果を公表する機会が増えた。

2019年度 戦略的研究（若手研究）の活動

向井伸哉（文学研究科講師）

1. 研究の課題と目的

14世紀後半、南フランスにおける自治体間の共同行為
本研究は、自治体間の個別的な連携から諸自治体が連合する地域集会の開催にいたるまで、複数の都市・村落自治体が織り成す「地域自治」のレベルに焦点を当て、ローカルなレベルでの自治体間の共同行為を、都市・村落文書が豊富に残存する14世紀後半南仏ベジエ地域を舞台に解明するものである。

こうしたローカルなレベルでの自治体間の共同行為、すなわち「地域自治」を復元することは、「村落<都市<領主領<地域<地方<王国」と小さな単位から大きな単位へと積み重なる「入れ子的統治構造」のミッシングリンクを埋め、中世世界の統治システムを総体的に把握することを可能にする。

2. 研究の内容

14世紀後半に作成された自治体文書の代表格として都市・村落自治体の会計簿や議会議事録が存在する。自治体会計簿の支出項目には、自治体間のメッセンジャーや使節のやりとり、地域集会に出席する自治体代表の派遣について記載がある。また、自治体議会議事録には、自治体間の個別連携や諸自治体が連合する地域集会に関する審議が含まれている。これらを、ベジエ地域の村落・都市文書館、あるいは文書の寄託を受けたエロー県文書館で悉皆調査・収集し、テキストの解読と分析を行う。

3. 研究経過

博論執筆時に入手済みのヴァンドレス村の自治体会計簿のみを分析し、自治体間の共同行為の一部を復元し、第37回関西比較中世都市研究会（2019年11月15日）にて、「14世紀後半南仏ベジエ地方における自治体間の協力関係：集会、使節、課税、連合」として報告を行った。また、フランス国立古文書館、エロー県文書館、ベジエ市文書館、ペゼナス市文書館、セリニャン村文書館所蔵の文書目録をオンラインで調査し、史料の残存・所蔵状況の把握を終えた。2020年3月の現地調査で各文書館を訪れ、デジタルカメラによる史料収集を行う予定である。

2019年度 文学研究科プロジェクト 「文学研究・文化研究の方法とグローバル展 開を探る」

堀まどか（文学研究科准教授）

1. 研究の目的と概要

文学研究の射程はどう捉えるべきか。じつは文学こそ、民族や国家の集団全体に関わる思考法や倫理観、そして歴史的記憶を作り出してきた装置であったともいえる。本プロジェクトでは、「文学」のもつ特質を意識的に把握したうえで、文学研究の従来の学術領域を超えて、文化認識や歴史観の同時代的現象を問題にする立場を投影しながら、未来の人文学研究の発信と展開の方法を若い世代とともに検討している。この研究の目的は、日本における文学研究・文化研究の方法と展開について、国際的な人文学の研究動向やグローバル社会の課題を総合的に検討することを通じて、その有効性と可能性を具体的に示し、また新たな方法を開発・構築すること。この目的のなかで、①気鋭の若い研究者の国際学会への参加の後押し（具体的には、国外学会での英語発表を準備し、パネル参加や個人発表の申請を念頭においた勉強会やシンポジウムを企画すること）、②本年度から新設された「文化構想学」科の方向を模索し、広く内外にアピールすること（勉強会やシンポジウムは、学部生や交換留学生などが参加できるオープンなものにすること）をめざしている。

2. 研究組織

堀まどか（文化構想学専攻アジア文化）、白田由樹（言語文化学専攻ドイツ語フランス語圏）、草生久嗣（哲学歴史学専攻世界史）、山本真由子（言語文化学科国語国文学）永富真梨（UCRC 研究員）、竹内一博（UCRC 研究員）、小笠原愛子（UCRC 研究員）、鈴木重周（UCRC 研究員）永井泉（UCRC 特別研究員、国語国文学・院生）、嵯本圭子（UCRC 特別研究員、アジア都市文化学・院生）

3. 研究経過・予定

第1回定例研究会（2019年7月23日）では、ロバート・ティアニー（イリノイ州立大学 UC 校・教授）による講演「文学・文化研究の射程：アメリカにおける日本研究の現状と方法、そして翻訳について」と研究打ち合わせ。第2回定例研究会（2019年10月30日）では、片岡真伊（ロンドン大学 SOAS・講師）による講演「書き換えられた「エピソード」—大岡昇平『野火』の

英訳現場から」と、2名の研究発表および討論を実施。第3回定例研究会（2019年12月26日）では、鈴木貞美（国際日本文化研究センター名誉教授）による講演「日本文化史の再建から文学史の再編へ—概念の重要性」と、3名の研究発表および討論。第4回定例研究会（2020年2月18日）では、計6名の研究発表をおこない、総括の討論会を行う予定。

2019年度文学研究科プロジェクト 「大坂の「記録」、大阪の「記憶」—土地の記 録と土地の記憶に関する学際的研究—」

菅原真弓（文学研究科教授）

1. 研究の目的と概要

昨年度実施した「大阪の地誌類に関する学際的研究」（研究科プロジェクト）の継続研究であり、より発展したテーマによる研究プロジェクトである。「大阪はどのように描かれているか」（美術史学）、「そこに蓄積された土地の記憶と現在」（地理学）、「描かれた江戸の旅」（観光学）という三つの異なる学問分野からのアプローチを意図した昨年度の研究成果を踏まえ、大阪（大坂）の町の記録（≡地誌類や名所絵、あるいは近世近代における大阪観光ガイド的なビジュアルイメージ）と大阪の町に残る記憶（≡たとえば近世以前からの歴史を踏まえての町の現在、既存の建造物が持つ記憶とそこで生まれる新たな試み）という二つのテーマを考える共同研究とした。「記録」と「記憶」をキーワードとし、より重層的かつ多角的に近世以来の巨大都市・大坂の姿をトレースしていくこととしている。具体的には「記録」の部分菅原と天野、「記憶」を大場、松井、嵯本が担当した。

2. 研究組織

菅原真弓（アジア都市文化学）・大場茂明（地理学）・天野景太（アジア都市文化学）・嵯本圭子（アジア都市文化学、院生）・松井恵麻（地理学、院生）

3. 研究経過・予定

7月2日に打ち合わせを持ち、今後の予定（研究会の開催、外部調査、研究成果公表）を決定。10月7日、11月11日、12月2日、12月23日、2020年1月6日に研究会を実施（予定も含む）。8月22日には外部資料調査（千島土地株式会社）を実施した。2020年3月15日には、大阪市立住まい情報センターとの共催によるシンポジウムを開催予定。タイトルは「大坂の「記録」、大阪の「記憶」—土地の記録と土地の記憶に関する学際的

研究一」(仮)。外部登壇者として弘本由香里氏(大阪ガス CEL 研究員)に依頼している。

2019年度文学研究科プロジェクト 「モダニズム揺籃期における産業/芸術観の 諸相—ヨーロッパ比較文化論の視座から—」

白田由樹(文学研究科准教授)

1. 研究の目的と概要

19世紀末から20世紀の転換期にベルギー、フランス、ドイツ、オーストリアの4国で展開された応用芸術運動について、各国で提唱された理念や社会的意義、作り手や受容者の階層と相互関係に着目し、それぞれに模索されたモダニズムの方向性とその決定要因を、比較文化論的視座から解明することを目的とする。まず、イギリスの運動に影響を受けて大陸側で試みられた応用芸術復興の理念を、そこに携わった人物の主張と実践、それぞれの国の社会背景や世論から検討する。また、これらの人物や国家間、あるいは階級間の共鳴や追従、競合や反発といった関係性を浮き彫りにしつつ、「新しい芸術」のモデルや方向性の過程を跡づける。さらに各々の研究成果を比較検討しながら、より俯瞰的な視座へと総合させることを目指す。

2. 研究組織

白田由樹(ドイツ語フランス語圏言語文化学フランス語圏領域)、高井絹子(ドイツ語フランス語圏言語文化学ドイツ語圏領域)、長谷川健一(ドイツ語フランス語圏言語文化学ドイツ語圏領域)、辻昌子(UCRC 研究員)

3. 研究経過・予定

2019年7月31日に打ち合わせ会議を行い、年間の定例研究会の進め方について話し合った。その後、9月24日に第1回定例研究会を開催し、大坪明氏(武庫川女子大学教授)の講演と白田の報告を行った。続いて10月22日に第2回の研究会を開き、中島廣子氏(大阪市立大学名誉教授)と辻が報告を行った。今後、12月27日に第3回、2月22日に第4回の研究会を開催する予定である。また来年度に向けて、当プロジェクトとそれに先立つ科研基盤研究(C)の研究成果を取りまとめて共著書を出版する企画が進行中である。

2019年度文学研究科プロジェクト 「東地中海世界の歴史的展開を、古代から現代に至るまで通時的に再検討する」

北村昌史(文学研究科教授)

1. 研究の目的と概要

古来、19世紀にヨーロッパの勢力が台頭するまで、ユーラシア大陸の政治的、経済的、文化的中心は、中国、インド、ペルシア、および地中海の東岸であった。地中海でも、イタリア半島よりも西の部分は中世まで基本的に辺境であった。東地中海世界の歴史的意義は疑いようもないものであるが、現在の研究状況では、王朝や時代ごとに研究が特化しており、通時的に把握しようという試みは十分展開していない。

2. 研究組織

幸い、文学研究科の専任教員にはオスマン帝国史を専攻する上野雅由樹、そして終焉の地がイスタンブールであったドイツの建築家ブルーノ・タウト(1880-1938年)の研究を進める北村がおり、UCRC 研究員には、古代ギリシア史の竹内一博、ビザンツ帝国史の片倉綾那と貝原哲生、ドイツ帝国とオスマン帝国の19から20世紀転換期の経済関係に取り組む前田充洋、そしてトルコ共和国史の上野愛実と、文学研究科は東地中海世界の歴史的研究を進める研究者が充実している。このメンバーに比較・交流史の視点からフランス中世史を専攻する向井伸哉講師を加え、東地中海世界の通時的考察に取り組むための研究プロジェクトを立ち上げることにした。

3. 研究経過・予定

今年度は、東地中海世界を通時的に取り組む具体的課題を明確にするために、月1回のペースで研究会を開催している。10月にはフランス国立科学研究センターのヴィヴィアン・プリジャン、11月にはゲッティンゲン科学アカデミー/オーストリア科学アカデミーのエカテリーニ・ミツォイとオーストリア科学アカデミーのヨハネス・プライザー=カペラーを迎えて、国際的な研究交流のもと研究プロジェクトを遂行している。

科学研究費の基盤研究(B)も申請したが、その採択いかんにかかわらず、今後もこのテーマを継続し、UCRC を国際的な東地中海世界研究の拠点とすることを究極的な目的と考えている。

2018年度都市文化研究プロジェクト 「近代日本におけるドイツ系商会の経営と貿易—C. ローデ商会の伊予鉄道への機関車輸入について—」

松居宏枝 (UCRC 研究員)

本調査研究は現在も進行中であるが、これまで次のことが明らかになった。

C. ローデ商会の経営および貿易の特徴として、まず次の三点を挙げることができる。一つ目は、岩崎 (三菱)、古河、住友などの大企業との取引があり、なかでも足尾銅山や別子銅山などの鉱山で使われる機械を受注していたことである。これは、政府系の受注を中心としていた H. アーレンス商会や C. イリス商会と異なる点である。二つ目に、ハイゼのような技術者を自社で雇用していたことである。これは、ジューメンスの代理店の受託失敗と関係すると推測される。これによって、単なる商品取次を行う商会ではなく、技術や専門性に特化した工業製品輸入商会となることができた。伊予鉄道の機関車に関する詳細な注文を受注し、技術的な変更に対応することができたのも、自社で技術者を抱えた C. ローデ商会の特徴といえる。三点目に、ジューメンスやバイエルといった、ドイツの大手企業の日本代理店を受託することができたことである。

本調査研究にすることで、日本で政府系の受注を中心に大きく成長し、駐日ドイツ公使、領事との関係も深かった H. アーレンス商会や C. イリス商会とは異なる、C. ローデ商会の経営と貿易を明らかにすることができた。C. ローデ商会は、日本とドイツの大手企業の間をつなぐことによって成長した商会といえ、ドイツ系商会における経営手法の違いと競合の実態が新たに明確となった。

2018年度都市文化研究プロジェクト 「『ハーフ』コミュニティに関する社会学的研究—人種の混交現象、都市の『語らい』の場、多文化共生社会—」

ケイン樹里安 (UCRC 研究員)

本研究は、「ハーフ」と名乗り、呼ばれる人々の問題含みの日常についての経験的研究を共同研究によって前進させること、そして、研究成果を社会に向けて積極的に発信する方途を探ることを目的とするプロジェクトであっ

た。調査研究では、「語らいの場」と呼ぶ都市コミュニティへの参与観察、制度変遷や言説編成に関する資料収集、インタビューによる調査を共同研究者・下地ローレンス吉孝氏と共に実施した。調査の成果は前年で述べていた WEB サイト HAFU TALK ハーフトーク (<https://www.hafutalk.com>) のみならず、雑誌『現代思想特集新移民時代』への両名の寄稿、下地氏の『現代ビジネス』への寄稿、ケインの『ふれる社会学』(北樹出版、上原健太郎氏との共編書) および論文誌『新社会学研究』の査読論文の掲載、WEB マガジン『WEZZY』への寄稿、TBS『NEWS 23』への出演によって発信された。

2018年度都市文化研究プロジェクト 「都市における音楽文化の形成過程についての研究—心齋橋アメリカ村を事例に—」

柴台弘毅・加藤賢 (UCRC 研究員)

本研究プロジェクトは、心齋橋アメリカ村 (大阪市中中央区) の「音楽の街」という側面に注目し、この形成過程を通史的・多角的に分析するものである。そして、当地の事例と他都市の事例とを比較することにより、東京中心的に語られがちな「都市と音楽」の関係性を再考し、より一般的な理論モデルを構築することを目指す。2018年度の研究活動は、当地の音楽文化や都市計画についての資料蒐集・文献調査、フィールドワーク、並びに在阪の放送局・音楽事務所の関係者、アメリカ村を拠点に活動する実演家へのインタビュー調査を重点的に行った。2018年11月23日に開催された『第2回都市文化研究フォーラム—若手研究者が考える、都市と文化の〈現在〉』(於グランフロント大阪)において、レゲエミュージシャンの RYO the SKYWALKER 氏を迎え、「都市の音楽文化を考える—新齋橋アメリカ村とレゲエを事例に」と題した研究報告会を開催した。こうした2018年度の活動から、次年度以降、この研究プロジェクトを継続・発展させるために必要不可欠な基盤を築くことができた。

2019年度 UCRC 若手プロジェクト中間報告 「近現代メディアに表される軍事に関する比較研究—ドイツと日本を事例に—」

前田充洋 (UCRC 研究員)

本プロジェクトの目的は、近現代ドイツと日本におけ

る新聞やポスター、講話といったメディアの中の軍事や戦争を題材に、軍事と「一般」の社会経済の関係を検討し、その関係を多角的に捉えることにある。構成員は前田充洋、高岡佐登美、長尾唯（いずれも近代ドイツ史）と中嶋晋平（日本海軍のコミュニケーション論）である。これまで10月23日（長尾：家庭雑誌に見る第二帝政期ドイツの市民社会）、11月23日（高岡：19世紀初頭のドイツにおける労働需要と解放戦争）、11月27日（中嶋：戦間期における日本海軍のPR活動と民衆）、12月25日（前田：クルップ社の対日事業戦略と『日独工業広告』）に報告会を行った。

これらは2月14日開催予定の都市文化研究フォーラムの準備を兼ねる。フォーラムには摂南大学の林田敏子教授（近代イギリス史）および同志社大学の竹内幸絵教授（近代日本広告史）を招き、より総合的に議論を展開する予定である。

2019年度UCRC若手プロジェクト中間報告 「都市空間と人種化に関する社会学的研究 —「ハーフ」と越境する帰属の実践—

ケイン樹里安（UCRC研究員）

本研究の目的は、都市空間において立ち現れる人種化（racialization）の力学の可視化である。歴史的資料の渉猟および当事者へのインタビュー調査を実施した。まず、2019年6月に開催されたカルチュラルスタディーズ学会（カルチュラル・タイフーン2019）では、共同研究者の下地ローレンス吉孝氏が多様性に関するセッションのオーガナイザーの1人を務め、ケイン樹里安はRacial Tourism or Post Hafa Studies? と題した報告を行った。2019年10月の第92回日本社会学会では、下地氏が沖縄におけるフィールド調査について、ケインが「ハーフ」当事者のアイデンティティ形成の連関について報告を行なった。さらに、下地氏と議論を重ねつつ、2020年1月9日には第5回都市文化研究フォーラム内にてその成果の一部を報告すると共に、成果物が2020年度に公刊される予定である。

2019年度UCRC若手プロジェクト中間報告 「戦後日本における都市音楽文化の形成と変容—心斎橋アメリカ村を事例に—

加藤賢・柴台弘毅（UCRC研究員）

本研究は、戦後大阪のポピュラー音楽史における心斎橋・アメリカ村の歴史的役割を再検討するものである。1970年代半ばに形成された当該商業地区は音楽メディアならびに実演空間の集積地帯として、現在に至るまで大阪におけるオルタナティブな音楽実践の土壌であり続けている。そこで加藤・柴台は昨年より、フィールドワークを主体とした参与観察を行ってきた。

研究成果の一端として、2019年11月23日の都市文化研究フォーラムでは西日本最古の中古レコード店「キングコング」の創業者である回陽豊一氏をゲストに交えた発表を行った。1970年代に米国西海岸文化への憧憬を原動力として形成されたアメリカ村は、80年代になると多様な先駆的音楽実践を行う場となっていくが、その形成には自主独立的な関西の人的ネットワークが深く関与していたことが新たに判明した。今後は追加調査や収集資料の再検討を行い、投稿論文の作成へ結びつける。

『都市文化研究』編集委員会

進藤雄三（文学研究科教授）

1. 2019年度委員

平田茂樹（文学研究科教授，東洋史学）
進藤雄三（文学研究科教授，社会学，編集委員長）
森 久佳（文学研究科准教授，教育学，編集主任）
久堀裕朗（文学研究科教授，国語国文学）
古賀哲夫（文学研究科准教授，英語英米文学）
小田中章浩（文学研究科教授，表現文化学）

2018年度と約半数が入れ替わり、編集委員長は山祐嗣から進藤雄三に、編集主任は進藤雄三から森久佳に交代した。

2. 22号出版状況

2019年度は22号の編集を行った。研究論文4本、研究ノート1本、研究資料1本、研究展望1本、翻訳1本、書評1本、に加え、企画としてシンポジウム特集1本を掲載の予定である。

電子ジャーナル UrbanScope 編集委員会

佐伯大輔（文学研究科准教授）

2018年度編集の第10号が2019年5月31日に発行された。第10号は2件の特集（日本史学，教育学）と1本のResearch Noteからなる。特集は、「Introduction」や「Discussant's Comments」を含め、それぞれ6本の論文を含む。2019年度の第1回編集委員会では、「翻訳」枠の論文の扱いを変更した。これまでは、翻訳対象を「日本の文化・歴史・社会を対象とする日本語論文」とし、翻訳対象となる論文の選定方法を個別依頼方式としていたが、今後は、翻訳対象を「文学研究科の専任教員による日本語論文」とし、翻訳対象となる論文の選定方法を公募方式とした。これらの変更に伴い、新たに募集要項を作成した。2019年度編集の第11号は、佐伯，海老根，白田，辻野が担当している。現在，論文の部（投稿された1本について，査読を経て改稿中）と翻訳の部（申請のあった1本について翻訳中）が進行している。編集委員会は，4月23日と10月10日に開催された。

文学研究科叢書 編集委員会

佐金武（文学研究科准教授）

文学研究科叢書第11巻『ユーモア解体新書：笑いをめぐる人間学の試み（仮）』の執筆および編集作業が進行中。本書は，2016年度研究科プロジェクト「人間社会に笑いが存在する理由」の研究成果をもとに，学内および学外から新たな研究者を募り，人間に特有のユーモアと笑いという現象を「学際的人間学」の観点から多面的に解明する試みである。15名の執筆者による共著，単著合わせて12篇の論文集となる予定。編者は佐金武（編集長），佐伯大輔，高梨友宏。2020年度はじめての刊行を目指す。

2019年度 UCRC 研究員一覧

No.	氏名	受入教員	テーマ
1	シマザキ ミオ 島崎 未央	塚田 孝	大坂における油問屋中間
2	ヤマシタ ソウイチ 山下 聡一	塚田 孝	近世堺における神社触れと都市社会
3	ヨシモト カナミ 吉元 加奈美	塚田 孝	近世大阪における新地開発と茶屋
4	タニダ トシユキ 谷田 利文	塚田 孝	17世紀初めフランスにおけるポリスとエコノミー
5	ミチガミ ヨシタケ 道上 祥武	岸本直文	集落からみた地域社会構造と都市の形成
6	ハマミチ タカササ 濱道 孝尚	磐下 徹	古代日本における下級官人社会—写経所を事例として—
7	ワタナベ ヨウコ 渡部 陽子	磐下 徹	日本古代の物質文化—正倉院文書を中心に—
8	オカベ タケン 岡部 毅史	平田茂樹	中国古代の政治体制と皇太子・東宮の特質に関する研究
9	シオ タクゴ 塩 卓悟	平田茂樹	唐宗代の飲食文化
10	ワンエンピン 王 燕萍	平田茂樹	宋代における福建沿海地域の民間信仰
11	ナガオ アスカ 長尾 明日香	野村親義	19世紀インド西部における都市自治体と都市文化
12	キン ヨウ 軒 巍	野村親義	「満州国」産羊毛の流通及び輸出に関する考察
13	モリタ マドカ 守田 まどか	上野雅由樹	18世紀イスタンブルにおける街区共同体—近代移行期の秩序維持・国家管理・集団的アイデンティティ—
14	カイハラ アキオ 貝原 哲生	北村昌史	ビザンツ末期～イスラーム時代初期エジプトにおける聖人崇敬
15	キタ タケシゲ チヒロ 喜多(武重) 千尋	北村昌史	リソルジメント期におけるイタリア人愛国者の諸都市を結ぶネットワーク
16	マツイ ヒロユキ 栢居 宏枝	北村昌史	明治期における日独通商・外交の研究
17	マエダ シンヒロ 前田 充洋	北村昌史	近代ドイツの海をめぐる研究とドイツ企業の対日製品供給活動をめぐる研究
18	タケウチ カズヒロ 竹内 一博	草生久嗣	古代ギリシアの歴史叙述における「地域の記憶」と「ポリスの物語」
19	ウエノ マナミ 上野 愛実	草生久嗣	1950～70年代のトルコ共和国における宗教教育政策
20	カトウ 加藤 はるか 加藤 はるか	草生久嗣	中世後期イングランド北西高地の生業と私有のフォレスト
21	サエキ アヤナ 佐伯 綾那	草生久嗣	ビザンツ帝国における宮廷女性の居住空間
22	ハラダ アキコ 原田 亜希子	草生久嗣	近世ローマにおける都市の経済活動
23	タジマ アツシ 田島 篤史	草生久嗣	悪魔学書『魔女への鉄槌』における神学議論
24	ヒロセ ミチヨ 広瀬 美千代	進藤雄三	クアラールの困難性・劣位性とそのアイデンティティの確立
25	フジワラ ノブキ 藤原 信行	進藤雄三	C. W. Millsは批判的社会学者か—異なる側面とその社会学的意義の探求—
26	ワタナベ タクヤ 渡辺 拓也	進藤雄三	都市下層の存在形態からの都市空間の統治の構造と実態の解明
27	シモジ ローレンス 下地 ローレンス吉孝	石田佐恵子	沖縄における「ハーフ」「混血」をめぐる人種構造と日常生活
28	ナカジマ シンペイ 中嶋 晋平	石田佐恵子	アジア・太平洋戦争期における広告と国家宣伝
29	ケイン ジョリアン ケイン 樹里安	石田佐恵子	人種の混濁現象と帰属の実践についての社会学的研究
30	ジョン 全 ウンフィ 全 ウンフィ	伊地知紀子	宇治市ウトロ地区をめぐる場所の混層的構築—戦後の存続要員と居住権運動の展開から—
31	オカオ マサヒデ 岡尾 将秀	川野英二	幕末維新期における民俗宗教の伝統の解体と発明
32	サクラダ カズヤ 櫻田 和也	川野英二	ポストモダン都市における社会調査の方法論的研究
33	タニタ タクヤ 田端 拓哉	池上知子	非都市的生活環境と所属集団はトラウマ経験がもたらす負の影響を緩和するか—全国の成人を対象にした社会調査の2次分析—
34	アダチ ナホコ 安達 菜穂子	池上知子	家族規範によるホモフォビア表出の正当化効果—偏見の正当化・抑制モデルを用いた検討—
35	カワサキ ヤヨイ 川崎 弥生	山 祐嗣	虚記憶の生成における検索過程の働き
36	カワグチ タケミ 川口(立見) 夏希	大場茂明	社会連帯経済の空間性に関する地理学的研究—参加型都市計画との合流—
37	オカダ タカシ 岡田 高志	丹羽哲也	日本古代文学の表現とその特質—倭の伝統と漢風志向と—
38	オガサワラ アイコ 小笠原 愛子	小林直樹	『今鏡』の叙述意識
39	タカダ クミ 高重 久美	奥野久美子	芥川龍之介—第一高等学校時代の交友と文学—、および平安和歌の注釈研究

40	タブチ キンヤ 田淵 欣也	松浦恆雄	中国近世文学研究
41	シンドウ ユキ 進藤 友貴	高井絹子	フランス・ヴェルフェルの断片『ボグロム』の背景とユダヤ性の問題について
42	オオヤマダイキ 大山 大樹	福島祥行	外国語教育におけるリフレクションを促すグループワークの質的研究
43	カタヤマ ミチオ 片山 幹生	福島祥行	中世音楽劇の歴史的再現上演の可能性
44	モリハラ アサミ 森村 采未	福島祥行	J. F. ハイナッツの正音法における体系分析
45	ヤブジウ リコ 山上 紀子	福島祥行	オディロン・ルドンの造形—その起源と影響—
46	ツジ マサコ 辻 昌子	白田由樹	フランス世紀転換期における装飾芸術と大衆ジャーナリズム
47	スズキ シゲチカ 鈴木 重周	白田由樹	フランス文学史と「ユダヤ文学」
48	ヨシダ マサヒロ 吉田 全宏	野崎充彦	在日コリアン寺院を巡る宗教者と信者の動態
49	シバダイ コウキ 柴台 弘毅	増田 聡	都市における音楽文化の形成過程についての研究—心齋橋アメリカ村を事例に—
50	ナガトミ マリ 永富 真梨	増田 聡	日本におけるカントリー音楽の人種言説の変遷
51	カトウ ケン 加藤 賢	増田 聡	都市における音楽文化の形成過程についての研究—心齋橋アメリカ村を事例に—